

講演

インキュベーターとしての劇場 ～DANCE BOX 8年間の軌跡～

大谷 燠

DANCE BOXを立ち上げたのは1996年。大阪の千日前にあるトリイホールを拠点にダンスに関わるアーティスト、プロデューサーがダンスを取り巻く環境を良くしていこうと集まったのが始まりである。アーティストミーティングを開催し、各々のアーティストが抱えている問題、望んでいることなどを意見交換する中で、現在のDANCE BOXの活動の基礎的なスタイルが生まれた。

アーティストにとって一番大きな問題は、公演場所がないということであった。当時、関西でダンスに積極的に取り組んでいたのは伊丹のアイ・ホールくらいで、ソロや少人数のユニットが自主公演するには経済的にも空間的にも負担が大きかった。一方、ギャラリーやカフェなどの施設では十分な照明や音響設備がなく、作品が限定されるという問題があった。トリイホールはキャパ80席で、設備も整っており、そういった意味でも最適な空間で、ホールの最も稼働率の低い月曜日を「ダンスの日」としてプロジェクトをスタートさせた。

オープニング企画は「ダンスサーカス」。5組のアーティストが各12分の作品を発表するもので、当初は16時、18時、20時の1日3ステージというハードなスケジュールだったが、アーティストも私もたいへんな意気込みだったことが窺える。入場料も映画と同じ1800円に抑え、観客増をねらった。

当時はスタッフもアーティストがボランティアで行なっていて、観客の少ない日は衣装に着替えて街なかで情宣活動をしたこともあった。身体で発想して、すぐに行動するという方法は今でも受け継がれている。

DANCE BOXはこのように始まったが、年を追うごとにそのシステムを整備してきた。まず、アーティストの育成事業として前述の「ダンスサーカス」を登竜门的なプログラムとして位置づけ、年4回開催している。年間約40～50組のアーティストがこのプログラムで作品を発表することになる。関西圏だけでなく、東京をはじめ地方や、近年では海外からの参加者も増加している。＜身体＞で＜表現＞するものであれば、基本的に誰でも参加できる。基礎となるテクニックがバレエであれ、モダンであれ、舞踏、ヒップホップ・・・何であれ、表現にオリジナリティーがあり先駆性、

社会性が少しでもあればOKである。終演後には参加者とスタッフが作品について話し合う時間を設けている。一方的に批評するというのではなく、作品を良くするためにはどうすればよいかということ互いに話し合うことでアーティストとの協働性が生まれていると思う。

さて、この「ダンスサーカス」で良い作品を創ったアーティストはステップアップして「ダンスボックス・セレクション」に出演できる。ここでは20分の作品が発表でき、現在関西から国内外で活躍するようになったアーティストはほとんどこのプログラムを通過している。さらに、すでに表現者として自立しているアーティストの単独公演を年間10～12本「ダンス・インディペンデント」としてプロデュースしている。また、来年度に向けてAWARDの創設を計画しているが、わかりやすいステップアップのシステムをつくることでアーティストの創作意欲を刺激し、優れた作品が生まれる環境をつくっている。その結果、関西ではコンテンポラリーダンスのアーティストは増加し、裾野は確実に広がっていると思う。一方、観客は増えているか？

DANCE BOXでは観客を育成するために、様々な試みを行なっている。ひとつは一般を対象としたワークショップである。小中学校の総合的な学習の時間を利用したもの、障害のある人や中高年を対象としたもの、地域のコミュニティーと連動したもの等。期間も1日限りのものから数ヶ月にわたるものまで多様なスタイルがある。これらのワークショップではテクニックを教えるのではなく、身体を動かすことで新しい自分を発見することや、身体を通じたコミュニケーションを創ることに主眼を置いている。これらのワークショップへの参加者は年々増えており、身体感覚の衰退という現状を顕しているように思う。

また、年に3回開催している「アートキャバレー」では飲食しながらダンスを観るという環境を創っている。これは20世紀初頭、スイスのチューリッヒにダダイストのフーゴ・バルが開店したキャバレー・ヴォルテールや江戸時代の歌舞伎がヒントになっているのだが、劇場がある意味、教育的な場として考えられている概念を壊したいと思うて始めた企画である。

他に、DANCE BOXが2002年新世界という大阪

でも非常にディープな地域に新しい劇場を創ったことをきっかけに、「コンテンポラリーダンスin新世界」というダンスを劇場外で上演するというプロジェクトを始めた。これは普段、ダンスにも興味がなく劇場にも来ない人たちに気がつくダンスを観てしまったという状況をつくる為に考えたプロジェクトである。

これらのアプローチを不断に持続しながら、道のりは長いが少なくともコンテンポラリーダンスに限られた芸術愛好家のものではなく、ひとりでも多くの人に観てもらい裾野を広げることが現代社会にとって必要なことと考えて、これからもDANCE BOXの活動を続けていきたいと思っている。